
真・恋姫無双～黒き鬼と姫達との邂逅～

燼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫無双〜黒き鬼と姫達との邂逅〜

【Nコード】

N9051Z

【作者名】

燼

【あらすじ】

幻魔神を倒し、

妖星を壊して、逝った。蒼鬼

そこで神から力をもらい。とある世界の人を救って欲しいと言われる。

さてはて、蒼鬼は、どうなるのやら!?

第一話「蒼鬼、神に会うとの事」(前書き)

駄文です。処女作です。恋姫の内容を全くしりませんので、こんな感じ？です。すめて行きます。ご了承下さい。

第一話「蒼鬼、神に会うとの事」

「ここは？どこだ？確か最後に妖星を壊して、消えたはず……」

突然後ろから誰かの声が？聞こえてくる

「よう？気がついたか？俺はお前らで言う事の神だよろしくな？」

「よろしくな？じゃねえよ！ここは、いったいどこだ！」

と蒼鬼が聞く

「ここか？ここは、未練を残したものが、滞在する、あの世とこの世のまあ中間みたいなもんだ」

と、神が答える

「そうか……で？俺に何をして欲しいんだ？」

「察しがいいな！まああれだとりあえず力やるから、とある世界の人を救ってこい。あ、これお願いじゃなくて命令だからよろしく」

「ああわかったじゃ送ってくれ」

「聞き分けがいいな？まあその方がいいんだが……じゃ行つてこい。あ、力は向こうで、頭のなかで力と念じてくれ、出てくるから」

「分かったじゃな」

パチンと神が指を鳴らすと、蒼鬼の下に穴が開く

「へ？なああああ！？なんで、こんな送り方なんじゃー！」

さて、蒼鬼の新たな物語が、始まる

第一話「蒼鬼、神に会うとの事」(後書き)

こんな感じですが、どうでしょうか？出来たら感想を宜しくお願いします。出来たら続きも、書いて行けたらいいなと思います。誹謗中傷は、要りませんのでよろしくお願いします。

第二話「蒼鬼、大地にたち、力を確認するとの事」(前書き)

2連続で投稿です。下手で、主人公の口調とか変わってるかもですが、出来たらスルーで、お願いします。

第二話「蒼鬼、大地にたち、力を確認するとの事」

「よし・・・ついた。穴からでた時あんなことがあったがまあいい。思い出したくもねえ・・・」

そして蒼鬼は、神から言われた事を、実践する。

「念じるんだったな・・・いかにもあれだが、確認しねえとな・・・胡散臭いが」

念じると、始めにでてきたのは、蒼鬼が、母親からもらった大太刀「これは、山河慟哭？まあ持ってみないとな・・・うお前生きて持ってたのより軽い！さらに能力強化？なんだこれは・・・さらに、鬼の籠手や、眼まで・・・自分の体も、軽いし。なにがしたいんだあの神は」

力を確認した蒼鬼、この後どうなるのやら！？

第二話「蒼鬼、大地にたち、力を確認するとの事」(後書き)

今回もこんな感じですが、どうでしょうか？出来たら感想を宜しく
願います。けど誹謗中傷は、要りませんのでよろしく願いま
す。

出来たらもうちょっと強くしてみたいです

第三話「蒼鬼、神と再び語るとの事」(前書き)

力を確認からの続きです。一応蒼鬼は、神の存在を、認識していますが、これは、曲がりなりにも、幻魔神という存在をみたがために、まあいいや？みたいな感じになっているがためです。まあご都合主義です。すいません

第三話「蒼鬼、神と再び語るとの事」

「さて、軽く確認したが、あまり使わない様にするか、鬼神化、皆から力をもらってやったものを、籠手を填めて姿を思い浮かべたら成れるなんて、異常過ぎるし、鬼の眼もそうだ、開眼したら、身体能力さらに上がるは、動体視力上がるは、で・・・まああまり使わない様にしよう」

と思っていたところ、突然蒼鬼の頭に言葉が、

「そうだなあまり使わないに、越したことはないが、大事な時は使えよ？」

「つつ！この声は、糞神！？いきなり声かけてきやがって、頭痛えじゃねえか！」

「なに、救って欲しい人の名を言うの忘れててな？」

「そつえば聞いて無かったな？その人の名は？」

そう蒼鬼が、聞くと？

「孫策という人物だ。まあまだまだ要るがな、」

と神が答えると、蒼鬼は。

「な！1人だけじゃないのかよ！？」

と驚きながら蒼鬼が、聞く

「あたりだ、誰が1人だけと言った。人とはいつたが人数は、指定してなかったろう?」

「うち!じゃあ誰なんだ?その人達は?」

「その人達は、まずは孫権と甘寧だな、盗賊に、襲われてるだろうから、宜しくな?」

「

「またかよ!?それ、まあいいけどさ、何処にいるんだ?」

「場所は、こつか

ら北だ、頭んなかに地図
入れておくから頑張れよ?」

「あいよお!でまたさっきの頭痛くるわけ?」

「当たり前だ。じゃ今度こそ宜しくな?」

神が、蒼鬼の頭に数秒触れると、また蒼鬼は、頭を抱えながら身悶えた。

「あ、いい忘れてた、今のお前かなり身体能力強化してあるから、3日あれば、いけるぞ?まあ頑張れやちようど此処から4日だらよ?昼夜関係なかったら3日でつくわ。」

と言うと神は、今度こそその場から消え去った

「あの、糞神があ……………」

第三話「蒼鬼、神と再び語るとの事」(後書き)

今回もこんな感じですが、どうでしょうか？出来たら感想を宜しく願います。けど誹謗中傷は、要りませんので宜しく願います。色々ご都合主義が、ありますが籠手とか、ご了承下さい。すいません

さて次は出来たら、孫権と甘寧と絡ませてみたいなと思います。出来たらですが、

では、この辺でさようなら

第四話「蒼鬼、北へ全力で走るとの事」(前書き)

前回からの続きです。あ、誤字があつた箇所があつたので、少し修正しました。皆様からも、誤字脱字が、あれば言ってください直します。それから、八雲葵さん、ご指摘のコメントありがとうございます。出来るだけ頑張つて行こうと思いますので、宜しく願います。では、前書きはこれくらいで、

第四話「蒼鬼、北へ全力で走るとの事」

「うう……. やつと収まったか……. あの糞神め……. 大分痛えじゃねえか」

ぶつくさと文句を垂れる蒼鬼

「文句ばっかいてもはじまらねえ……. 行くか、あの糞神の口ぶりだと、もう襲われてるかも知れねえしな。地図も、さっきと同じ要領で、やりや良いんだろっ」

と、頭のなかで、地図を思い浮かべながら念じる蒼鬼

「よし、出たみたいだな、このまま本当に北へまっすぐみたいだな、じゃ急ぎますか!」

蒼鬼が足にめいっぱいの力を込めて走り出す

「うおあ!?! こんなに体が軽いのか、まあいいさっさと行くとするか!」

さてはて蒼鬼は、孫権と甘寧を助けるがため北をひた走るさて、どうなることやら

第四話「蒼鬼、北へ全力で走るとの事」(後書き)

すみません。なんか走り出すしかできませんでした。作者の文才のなさの原因です。すみません

次こそは、孫権と甘寧を出そうかなと思っています。がんばります。

出来たら感想下さい。誹謗中傷は、要りませんが、では、またー

第五話「蒼鬼、姫達との邂逅を成す?との事」(前書き)

遅れましたが、新年明けましておめでとうございます今年もこの小説を宜しく願います。さつ続きです。とりあえずみてください。見るに絶えないと、思いますが、宜しく願います。

第五話「蒼鬼、姫達との邂逅を成す?との事」

蒼鬼が、ひた走り村へ向かっている頃

「つく!なんで、まだこんなに賊が!?あの時は、こんなに多い感じじゃなかったのに!?左、そのまま展開しつつ賊どもを蹴散らせ!

その時、私は、この村へ来たときのことを思い出していた。

side: 蓮華

行きなりの、挨拶すまない。

私は、姓は、孫名は、権字は、仲謀という

「あ、あの?蓮華様?どちらを向いて喋っていらっしやるんですか?」

この娘は、私の護衛。姓は、甘名は、寧字は興覇。真っ直ぐで、私より強く、あまり融通がきかなく私より、胸がすこしいs

ぶおん!と甘寧の剣が、孫権の横をかすめる。

「ひゃ!あぶないわね思春いきなり何するのよ」

「いえ・・・何か蓮華様から何か私に関して不穏なことを思われたような、気がして・・・」

「私が、そんなこと思ってないわよ?気のせいじゃないの?」

「そうですか・・・申し訳ございませんでした。」

「いえ？いいのよ（つく・・・やはり鋭いわね）」

「蓮華様・・・？」

「いえ？なんでもないわ・・・それより思春時間は、大丈夫かしら？」

「はい、雪蓮様からのご命令の、日輪が、蒼天の中央を差すときまで、後、半日以上もあります。間に合いますよ。」

「そう、なら大丈夫ね。ふうじゃあ次の村で少し休みましようか。このまま行っても構わないけれど、他の皆がね？」

「分かりました。それにちょうど村が！」

「どうしたの？思春？」

「蓮華様、村から黒い煙が！」

「何！？では、助けに行くわよ！」

「御意・・・」

孫権達が、村へついた時には、そこは賊達に、村人達が、殺され、村を壊されている光景だった

「つく！半分は、私と共に！もう半分は思春に！」

「蓮華様・・・御武運を」

「思春貴女もね・・・死んだら駄目よ？」

「は！それでは」

甘寧は、部隊の半分を連れ村の中へと勇んで行った

孫権は、行った甘寧を見届けると、剣を抜刀しこう言った

「この、村にいる賊どもを許すな！人とは思わず獣と思い殲滅せよ！抜刀！」

こうして孫権達も賊がいる場所へと進んでいったのであった。

冒頭へ戻り数時間が経過

「はあ、はあもう粗方倒したと思うけれど、思春は、大丈夫かしら？」

ふと回りを見渡した孫権が、息をついた瞬間後ろから影が、

「！？」

後ろを振り向くと其処には、剣を振りかざした賊が

（やばい・・・殺られる！）

その時孫権は、目をふさいでしまった
だがその瞬間ガキン、という音に阻まれる

そこにいたのは、思春ではなく、大太刀で防ぐ男の姿だった

「大丈夫か？立てるかい？」

口を動かしながら、指を男の前に指した。

「ああこいつか、ふん！」

男が、力を入れ剣を弾き相手を斬った

「これでいいな・・・改めて言うが立てるかい？」

「ええ・・・」

と孫権が男の手をとり立ち上がる

「ありがとう。貴方は？」

「それは、後にしようここの賊を、倒してからだ」

「ええわかったわ。ところでつり目のした。髪を束ねた褐色の女の子を見なかったかしら？」

「ああ見たぜ？というか、その子に頼まれてな、ついさっき来たときその子も君のような感じだったから助けて、二手に別れてきたのさ」

「そう・・・わかったわ」

二人は、共に賊の首領の元へ、

その途中

「蓮華様！」

「思春！」

二人が、その場で、抱き合う

「よかった無事なのね」

「蓮華様も！」

「おいおい、時間がないだろうが、そういうのは後にしろ」

と、男が、諫める

「ごめんなさい。さあ行きましょう」

其処には、賊とその首領がいた。

首領は、此方を見ると切りかかってきた

首領が踏み出すが、これを大太刀にふさがれる

「ふうそんな単調で、どうするよ。全く」

と、防がれ斬られる

「うぐあこんなところで・・・」

首領は、事切れる

「うわあああ首領が殺られたああ！」

賊どもは、逃げるが、回りこまれる

「ひい！お前は、いつたinnanなんだ！」

「俺か？俺は、灰燼の蒼鬼だ！」

「ひい助けてくれえ」

「お前は、助けてと言った人に何をした？」

「・・・」

そつ賊は、黙ると、数秒後に蒼鬼にただ切られていた

「よし、終わった。さて二人ともどうだ？大丈夫か？」

「ええ／ああ」

「そついえば聞いて無かったな名前」

「私は、姓は、孫名は、権字は仲謀真名は、蓮華だ」

「私は、姓は、甘名は、寧字は、興霸真名は、思春だ。宜しく頼む」

「俺はさつきも、言ったが、灰燼の蒼鬼だ宜しく」

蒼鬼と、姫達であったさてはてどうなるのやら

「ところで真名ってなんだ？」

「へ？」

どうなるのやら！？

第五話「蒼鬼、姫達との邂逅を成す?との事」(後書き)

どうも、いかがでしたでしょうか?真名等の事は、次回にきちんと出来るだけ頑張つてしますので、名乗るだけで勘弁してください。これが、限度なんです。すいません。

では、行きなりですが、また次回お会い出来たらお会いしましょう。
では、

第六話「蒼鬼、真名をの意味を知り、名を教えるとの事」(前書き)

今晚、作者こと、燼です。少し期間が空いてしまってますいませんでした。出来たら直ぐ投稿したかったのですが、いかんせん、お餅とかがですね……

すいません

今度からは、出来るだけ早くするつもりなので、ではまたあとがきで

第六話「蒼鬼、真名をの意味を知り、名を教えるとの事」

「え？真名を知らないの？」

「ああ、俺の所では、そういう風習がなかったからな。」

「じゃあその名前は、本名じゃないんだろう？」

「ああ本名は、結城秀康という。なんで、本名言わなかったのかは、癖だ。」

「癖？本名を、言わないのが癖なの？」

「ああ、まあな何か町の人達が、灰燼の蒼鬼やら、アオ鬼とか、言うからな。めんどくさくなって、灰燼の蒼鬼と名乗ってるわけだ。後由来は、今は、二本も、持っていないが、二本の大太刀をふるい鬼神のごとく敵を倒すからだそうだ。」

「訳って、貴方ねえ・・・まあいいわ、何で今一つしかないのかとかは、聞かないわ。真名の事教えてあげる。」

「ああそうしてくれると嬉しい。」

「じゃ、説明するわよ？真名は、親から貰う大切なもので、自分自身が、認めたり、しない限り、決して教えてはいけないもの、それが真名なの」

「は？そんな大事なものを、簡単に教えて良いのかよ？」

「いいから、教えたのよ。私が、良いと。思春も、にたような感じでしょうけれど」

「はい。私も蓮華様が、おっしゃったように自分が、そう思い、そう感じたからこそ蒼鬼に私の真名を許したのです。」

と、思春が、蓮華に続いてそう告げる

「わかった。じゃあ俺は文句は、言わねえ宜しくな！蓮華！思春！俺のことは、思春のように蒼鬼でもなんでも構わねえから」

と思いつきりの笑顔で蓮華達に向けて、そう告げる

注：蒼鬼は、イケメンです。超がつくほどの

by 作者

「わ・・・わかったわ蒼鬼。よ・・・宜しくね（な、なに！？あの笑顔反則じゃないの！？）」

「り・・・了解した。よろしく頼む。（むう・・・少し顔が熱い・・・あいつの顔が、まともにみれん・・・）」

と、内心思ってたらしい。お二人だが蒼鬼は、首を傾げる

しかし間髪いれずに蓮華が、

「あ！思春！日は！？」

その言葉に思春は、はっとしたのか、空を見上げると、

「まだ・・まだ大丈夫です。蓮華様、今から出れば、間に合います。」

と、思春は、告げる

「よし！わかったわ！ところで、蒼鬼貴方はどうするの？」

「んー出来たら連れていってくれねえか？
まあ無理にとは、言わんが」

「いいわよ？それだけの武があるのだし、
着いてきてくれるのなら構わないわ？まあ試験は、受けて貰う
けれど？」

「構わねえ、宜しく頼む。」

と蒼鬼は、受け答える。

「じゃ決まりね？あ、言っておいてなんだけど、姉様には、
気おつけてね？」

と、蓮華が付け足す感じに、言う。

「なんでだ？てか、姉様って誰だ？」

と蒼鬼は、聞き返すが、

「試験の時には、分かるわよ」

と言い旅立つ準備を始める。

そして蒼鬼も、自分の準備にとりかかる。

さあ名を明かした蒼鬼。自分自身の事は、話さなかったが、何故なのだろうか！？

次回に続く！

第六話「蒼鬼、真名をの意味を知り、名を教えるとの事」(後書き)

如何でしたでしょうか？グダグダ感というか、性格変わりすぎだろとか、あるかと思いますが、いかんせん内容を知りませんけれども、好きな人達ですので、こんなかたちになっちゃいました。すいません。

なんかご指摘とかある方は、感想に、お書き下さい。出来るだけ反映しますので、

それでは、今回はこの辺で、
またー

第七話「蒼鬼、呉の姫たちと会い対すること」(前書き)

また日が、開いてしまって、すいません。本当にすいません。何回かやったのですが、スマホじゃ落ちる、落ちるwwそれでやる気が・
・・OTZ

まあ続きます。見るに耐えないとおもいますがよろしく願います。

第七話「蒼鬼、呉の姫たちと会い対すること」

side:雪蓮

「はあい はじめまして性は、孫名は、策字は伯符よ。よろしくね」

「おい、雪蓮どっちを向いて、喋ってる？とうとう頭がおかしくなったのかしら？」

「ぶーぶーおかしくなってるわいよ。冥琳」

と、性は周。名はユ（字が出なかったためカタカナです、すいません。）字は公キン（これも字が出なかったT口Tすいません。）が、笑いながら孫策につっこんだ

「もう・・・ところで、ちょっとうつついて来るわねーまだ蓮華もこないし」

「ちょっと待て、雪蓮。蓮華様が、こられるまでもう数時間も無い。それに将が、詰まんないからってふらふらしないうで頂戴？周りが、しまらないでしょ？」

と周ユが孫策に注意を促す。

孫策がしぶしぶといった顔で

「分かったわよ。待ってるー大人しくしてますよー」

ここでちょうど、陸遜が、伝令にやってくる

「雪蓮様ー雪蓮様ー、東の方向に砂塵ありですよー。蓮華さまの旗

も見えます。流石蓮華様です。
時間ぴったりでですよ。」

と感心した様子で陸遜はつぶやいていた。

その後ろで周ユと孫策は笑いあいながら、言葉を交わしていた。
「そのきつちりというか、ちゃんとするという融通のきかなさそう
なところが、蓮華の珠に傷な部分よ

ね。」

と孫策がちよつと笑いながらではあるがふつと息を漏らしながら
つぶやく。

しかしここで周ユが、

「そこが蓮華さまのいいところでもある。雪蓮も、少しは蓮華様を
見習って欲しいわ。」

ちよつと周ユを横目で見ながら孫策はつぶやく

「ええ。どついうことよ冥琳」

「まだこないからといってふらふらするようなどこかの誰かさんの
様にはなく。きちつとふらふらせ

ずきちつと、刻限に遅れずこれるようなところをだ。」

孫策は、まずいといった顔で

うう。と唸った

そのとき少しあせった感じで陸孫が、

「雪蓮様。雪蓮様。蓮華さまの軍の中に、見慣れない。青い鎧を
きた人が居ます。」

孫策が、すこし怒った風に言った。

「あら、蓮華は、ことあるごとに、私に注意するくせに自分は、そ

うするんだふくん」

だがここで周ユが、

「何を言うか、お前と違って、政務などをきちっとこなす。蓮華様だが、お前は違うだろうが、その分

そうしたってもかまわないはずだが？」

孫策が、うと言ってまずいというな雰囲気を出していた。

「ま・・まあとりあえず待ってましようか。もう少しで来るのだし。

」

「そうだな」

と言つて周ユと孫策は、東の方向。砂塵が起きている部分を見つめていた

side：蓮華

「思春？もうそろそろ付きそう？」

と蓮華が思春に伝える

「ええ、もう、旗が見えていますもうそろそろですよ？蓮華様」
と思春が言った

「ふう。しかし私も姉さまのやってることにあまり口うるさく言えないわね。私だって姉様と似たようなことしてるんだから」

とちよつと呆れた感じで言った。

そこで思春はクスッと嘲笑して

「蓮華様は昔からああやはりこの方はやはり雪蓮の妹様なのだとお

「もしましたよ。」

そのとき蒼鬼が

「そうなのか？思春。会っていないから分らないがそうは思えない無いだか」

思春がああと云つて答える

「ふふ、そうだなアレは十歳のとき蓮華様が……」

と言おうとした瞬間蓮華が大きな声で

「わーーーー！思春やめて！あの話だけは、あの話だけは」とさえぎる

そしてそういつてる間についてしまった。

そのときに蒼鬼が思春にコソつと聞こうとしたのだが蓮華に

「そこコンコンと聞いとうとしない！」

と言われたので蒼鬼は追及をやめたが思春は、妙にご機嫌だった

S i d e : 蒼鬼

「姉様久しぶり！」

「ええ、久しぶり蓮華、ところでその男は誰？」

とちよつと怒つた感じで聞く

「え・・（何かやらかしたかしら……？）えつと私たちを助けてくれた。とおり名を灰燼の蒼鬼と言つて、名を結城秀康というの。言つておくけど私と思春は、真名は、許してるから」

と言った瞬間、呉の皆様が

「え……ええええええええええ！！！！？」

孫策が、蓮華の肩を力強く持つて

「ほ．．．本当なの！？蓮華、あの人見知りが激しいあなたが．．．
本当なの！？」

蓮華が、少しおびえた感じで

「ええ．．．本当よ？」

孫策が蒼を睨みながら言う

「その青い鎧を着た。男！私と戦いなさい！」

蒼鬼がそこでポカーンとした顔で、

「はあ？」

周ユが蒼鬼の肩を持ちながら頭を抱え

「済まないが．．．戦ってやってくれ。ああなった孫策は止められない。」

蒼鬼が少し肩を落としながら周ユに聞く

「本当か？」

そして聞くと周ユが即効で

「マジだ」

と答えるそして蒼鬼は

「はあ．．．やれやれだ．．．」

とため息を吐きながら頭を垂れる

さてさてひょんなことから孫策と戦うことになるのか！？

「やってらんねえ．．．」

どうなるのか!?

第七話「蒼鬼、呉の姫たちと会い対すること」(後書き)

さつて雪蓮との戦闘フラグ立ちました！

まあ蒼鬼チート仕様なんで大丈夫なんですけどねwwww

雪蓮も若干チートですが……

まあ心配すると言えば自分の文才ですまjd

では次もがんばりたいとおもいますではコレで〜

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9051z/>

真・恋姫無双～黒き鬼と姫達との邂逅～

2012年1月8日23時49分発行